胡沙吹く風

横松和平太

　春とは云えまだ肌寒い或る日の午後、文京区の本駒込から本郷菊坂にかけて小一時間散策してみた。明治時代の小説家半井桃水(なからいとうすい)と樋口一葉に所縁(ゆかり)の地を訪ねたのだ。

　本駒込の養昌寺には半井家の立派な墓があり、桃水についての解説板が立っていた。白山方面へ南に歩けば、西方町に出る。この辺りは東大の本郷キャンパスに近く、昔から学者や文人達が多く住んだ町として知られる。漱石が千駄木の猫の家から、早稲田の漱石山房に移る間に住んだ旧居もこの町であった。だが、そこは今でも静かな住宅街となっていて、案内板の類は少ない。すぐ近くに桃水の旧居跡もあったがそこにも案内板はない。標識があることで、人が押し寄せて迷惑に思う住民の方がおられるからであろう。桃水旧居跡から10分足らずで菊坂下を経て、本郷菊坂に着く。一葉一家が下谷竜泉寺町で小商いをすべく移り住む前に暮した町だ。菊坂通りの路地奥には古い井戸ポンプが今も残されているが、ここにも案内板はない。近くに住む立花隆氏が〝井戸ポンプが今や残されていない云々〟との記事を書き、地元住民から批判されたことがあったと云う。かつての気鋭のジャーナリストも今や衰え、耄碌(もうろく)ぶりが目立つようだ。

　菊坂で一葉は、借家を実は奥から通りにほんの少しだけ近い処へ一度移している。桃水は一葉が菊坂に住んでいることを知っていて、近くの西方町に転居してきた。それを知った一葉が、少しでも近くに住みたかったのか転居したらしい。その後、下谷から福山町に転居して来るが、桃水は神田三崎町に既に越していた。西方町は台地上の町だが、桃水旧居跡から西側の坂下が樋口一葉終焉の地であり、此処には碑が建っている。明治29(1896)年11月23日24歳の若さの死であった。桃水の姿が何処かにいつもある。

　桃水は一葉が小説家になる道を開いてくれた恩師であり、写真で見る彼はイケメンだ。一葉の思慕した人であったと云うのも無理はない。

半井桃水

　今では一葉との逸話でしか知られることのない小説家だが、彼の略歴はこうである。万延元年12月(1861)、対馬藩の典医・半井家の生まれだという。明治21(1888)年に、創立間もない東京朝日新聞の記者となる。新聞小説家として同紙に連載小説を書く。一葉が彼の門下生のようなカタチとなったのは明治24(1891)年4月のことだった。桃水30歳、一葉18歳の時だ。桃水の代表作とされるのは、同年の「胡沙(こさ)吹く風」。しかしその後大正15年(1926)死去するまで、300編以上の小説を書き、長唄や俗曲などの作詞もしたというが、その作品は今では読む人もいない。忘れ去られた大衆小説家と言って良いだろう。

以上は樋口一葉に興味を持って関連本を読み進める内に知ったことであったが、何故か、「胡沙吹く風」という題名、胡沙という言葉がずっと気になっていた。キチンと確かめた訳ではないが、今では読むことが難しい小説らしい。胡沙とはどういう意味なのか？そしてどんな内容の小説なのか？私の興味、好奇心はそこに足を止めさせられた。

先ずは胡沙という言葉を調べて見ることにし、手近にある国語辞典をひもといて見た。載っていない。中型の幾つかの国語辞典を調べてみても、やはり載っていない。ならば漢和辞典ならばどうか？と思い調べてみたが、普通サイズのそれには載っていない！
作者のみならず言葉まで忘れ去られた存在なのであろうか？

国語辞典といえば『広辞苑』(新村 出 編 第六版)が最も権威のある辞書だろうと思い、当たって見ることにした。さすがに【こさ［胡沙］】の項目があり、こう書いてあった。

ーアイヌ語hosaまたはhusaの転。(胡沙は近世の当て字)息を吹きかけて霧を起し、病魔を退散させるというアイヌ神話から、蝦夷人の吹く息。息づき。ー

又、平安時代らしい和歌の例として、「こさ吹かば 曇りもぞするみちのくの 蝦夷には見せじ 秋の夜の月」も引用紹介されている。余談にはなるが、江戸時代後期の謎の旅する民俗学者とも言うべき菅江真澄は、〝こさ吹く蝦夷〟という古歌の意味を探って蝦夷ヶ島まで旅をしている。晩年の随筆集『筆のまにまに』(1816年刊)では、「こさ吹く」の意味を蝦夷人の間に尋ね、これを詳しく考証している。

では、桃水の「胡沙吹く風」は北海道が舞台の小説なのか？九州は対馬の出身のはずなのに、何か釈然としなかった。そこで次に本格的な漢和辞典を調べてみた。

『漢字源』(藤堂明保 他編 改訂第五版)には、こう出ていた。

【胡沙】①モンゴル地域の砂漠 ②魚の名。アイザメ科の海水魚

これなら納得できる。中国北方の大陸から吹いてくる風のことをイメージした題名だ。
今なら黄砂やPM2・5を乗せて吹いてくる迷惑なあの風のことなのだ。

題名の意味は何となく解ったが、一体どんな内容の小説なのか、現物は読めずともせめて粗筋でも調べて見ることにした。日本では大陸に最も近い対馬生まれの桃水は、何をどう書いたのか？手掛かりを探してみた。

小説『胡沙吹く風』

この小説は、明治24年(1891)10月から翌年の4月まで、150回にわたって東京朝日新聞に連載された。当時の新聞は連載小説が有力な売り物であり、読者獲得の重要なコンテンツだった。後年には漱石が同紙の専属小説家として入社し『虞美人草』で人気を博したのは有名な話である。直接の関係はなさそうだが、桃水は漱石の先輩筋にあたる訳である。

小説の内容について解説した資料がなかなか見つからなかったが、ようやく一冊の本があった。『ある明治人の朝鮮観 半井桃水と日朝関係』(上垣外憲一)には、桃水の人生を通して明治前期の日朝関係と日本人の朝鮮観が分析されていた。但し、何故か〝胡沙〟ではなく〝胡砂〟と一貫して表記されている。イメージはハッキリするが単なる誤記だろう。

この本によれば、小説の主人公は、父が日本人の薩摩の武士、母は朝鮮の貴族の娘という設定である。父と母は幕末の釜山で出会い、主人公を生む。釜山にあった対馬藩の倭館から、対馬の漁師に預けられ成長し、やがて親子は再会し、維新の戦で活躍するも父は戦死する。母を訪ねて朝鮮に渡るも、既に悪徳官吏の為に殺されていた。恋人との間に横槍、横暴を働くこの悪者に復讐をしたり、山賊を退治したりするなどの物語で前半部が構成されているという。朝鮮半島南部の釜山や慶尚南道が舞台となっているが、これには若き日の桃水の体験が反映されている。彼は家業の医家の関係で、少年時代釜山の倭館で暮らしたこともある。成人してからも、朝鮮語ができた彼は、朝日新聞の特派通信員として釜山に長く駐在し、李朝末期の社会情勢に取材した多くの朝鮮関係の記事を書いた。それらの体験が生かされ、朝鮮の説話をも取り込んだ大衆受けする新聞小説であったようだ。

『水滸伝』や馬琴の『椿説弓張月』のように、荒唐無稽な冒険譚、豊富な説話、奇想天外な筋立てなどからみて伝奇小説的なものと見られている。但し、主人公がソウルに上京してからの後半部では当時の政治的人物達が登場する。朝鮮の李朝末期政界に関係した大院君、閔氏、あるいは開明派の活動家・金玉均達や日本軍人をモデルにした人物である。その当時を時代背景とした政治小説のようであるという。桃水を生んだ対馬藩は、古来半島と列島との狭間にあって、政治、経済、文化の架け橋となった歴史がある。そんな桃水だからこそ書けた小説だったとも言えそうだ。

小説が連載された明治24年(1891)当時、日本は清国との間で朝鮮を巡っての覇権争いが続いていた時代である。前年には**山県有朋**は〝我ガ国、利益線の焦点ハ実ニ朝鮮ニアリ〟と外交政略論を主張し、軍備拡張要求を強めている。小説の中での桃水の政治的主張は、西洋諸国がアジアを侵略しつつある世界情勢に対し、これを防ぐには日清韓三国の同盟しかないというものである。陸は清国、海は日本が守り、朝鮮には主に外交で接して清国他の協力でロシアの進出を抑えるという対朝鮮政略のようである。当時の朝日新聞の論説とも近いものであったようだ。現実には軍事力による半島制圧という動きがある中では、余りにも理想的すぎた主張だったかも知れない。事実、歴史は日清(明治27年)・日露戦争(明治37年)へと加速し、このような主張はかすんでしまい、かき消されていく。桃水は明治28年(1895)初めに「続・胡沙吹く風」を執筆連載するも途中で中断となっている。

桃水は、朝鮮の民衆の中には秀吉による文禄・慶長の役(壬申倭乱)に由来する日本に対する憎悪が根強くあることをよく理解していた。武力による威嚇などは逆効果しか生まない。政治外交的手段によって朝鮮と親交し、人心を獲得し、更にその自立発展を日本が援助するという主張を、新聞紙上で150回も連載したという事実は忘れてならない。

桃水の主張は、朝鮮との関係が友好的なものから、戦争をもはらむ危険なものへと変わりつつあった時代の中にあって希望的過ぎるものだったかもしれない。連載当時桃水に師事し、小説家を目指していた一葉からも余り評価されていない。

一葉の目指していたものとは、世界が全く異なっていたからだ。桃水にとっては小説とは面白さであった。一葉はやがて花を開き、今も人の心を捉えている。

小説家桃水は忘れさられた。だが、『胡沙吹く風』の意味あるところは、朝鮮半島には我々日本人と同じ「人間」が住んでいる、という単純素朴だが忘れてならないことを書いたことだと思いたい。彼には軽視・蔑視観はなく、他者を思い遣る感受性があった。

福沢諭吉の脱亜論

では何故、当時の日本では桃水のような考えが消されていったのであろうか？
日本はアジアの中でいち早く開化への道を歩み始めたが、同じアジアの国に対しては古くから敬意と蔑視の入り混じった複雑な感情が根底にあった。

朝鮮へ向けた目は、征韓論に見るように武威による征夷の対象として見るのが普通であった。江戸時代の将軍を天皇にすり替え、異国との間に異域を設けそこを武威で同化させるという考え方である。日本は神国であり、アジアに対しては優位な国であるとする思い上がりがそこにはある。朝鮮、中国に対する蔑視や侮りがあった。事実、国の近代化に遅れをとった中国や朝鮮は欧米諸国からの侵略にさらされるままであった。欧米の圧力で開国させられたにすぎない日本は、自分がやられたことをアジアに対してやり返すことで精神的な屈辱感をはね返そうとしていた。

かの福沢諭吉は、脱亜論(明治18年/1885年3月『時事新報社説』)でこう言っている。
「わが日本の国土は亜細亜(あじあ)の東辺にありといえども、その国民の精神は亜細亜の固陋(ころう)を脱して西洋の文明に移りたり。しかるにここに不幸なるは、近隣に国あり、一を支那といい、一を朝鮮と云う。［中略］わが輩(ともがら)を以てこの二国を視(み)れば、今の文明東漸の風潮に際し、とてもその独立を維持するの道あるべからず。［中略］その国土は世界文明の分割に帰すべきこと、一点の疑いあることなし。我が国は隣国の開明を待ちて共に亜細亜を興すの猶予あるべからず。むしろその伍(ご)を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会釈(えしゃく)におよばず、まさに西洋人がこれに接するの風に従いて処分すべきのみ。」

裏側にはアジアへの期待と失望があるとしても、開明的な知性の人にしてこうなのだ。桃水とはまるで見方が違う。単にアジアを見限るだけでなく、征韓論に繋がるような武力侵攻を肯定するかの如き言説である。後に満州事変や支那事変から始まるいわゆる十五年戦争を主導した、軍人・政治家達の「日本は大東亜の盟主であり、指導者である…」という思い上がった考えにも繋がっているようだ。

アジア諸国に対する軽視、蔑視は思いの外根深いものがあると思えてならないのだ。相手側からみても日本に対する嫌悪感や不信感が、未だに消えないのは厳然たる事実だ。一国の指導者たる一部の人間が、懲りない言動を今日尚繰返すのを見るにつけ残念でならない。桃水のような人が、例外的存在となってしまったことが日本の不幸だとも思えてならない。再びそうならない為には、その意識の源流や問題の根底にあるものを考えてみなければならないと思う。

征韓論の源流

明治維新を成し遂げ明治時代をリードした政治家・知識人は、皆江戸時代末期の生まれである。木戸孝允、伊藤博文、山県有朋らの長州人、或いは西郷隆盛、大久保利通らの薩摩出身者達がいた。彼らは皆征韓論の持ち主であり、その師匠筋にあたるのが**吉田松陰**(1830～1859)だ。尊皇思想の持主にして、佐久間象山に洋学を学び、下田からペリー艦隊に乗込んで渡米を図ろうとして獄につながれた行動する知識人、思想家だった。彼が弟子の久坂玄瑞に送った手紙の中の次の部分に注目したい。

「間に乗じて蝦夷を懇(ひら)き、琉球を収め、朝鮮を取り、満州を挫(くじ)き、支那を圧し、印度に臨み、以て進取の勢を張り、以て退守の基を固くし神功の未だ遂げざりし所を遂げ、豊国の未だ果たさざりし所を果たすにしかず」(『遊室文稿』明治14年品川弥二郎編)

この主張の中には、幕末から太平洋戦争の敗戦にまで至る我が国の多くの指導者達に多大な影響を与えたものがあると思いたい。物事には因果関係があることが多く、ある日突然に引き起こされることは少ないようだ。今日につながる出来事のひとつの始まりが、ここには凝縮されている。朝鮮・中国への侵攻だけでなくインドに至るアジアにまで視野に入れている。清国が阿片戦争など列強からの侵略にさらされ、日本が黒船来航という欧米からの外圧に屈した状況下での発想だが、大東亜共栄圏のスローガンの原型が見える。

欧米列強には膝を屈しても、その分朝鮮・中国やアジア諸国から奪えばよいという発想は、強者から受けた屈辱を弱者に向けるという屈折した心理だろう。更に云えば、朝鮮・中国やアジアに対しての優越視と、その裏返しとしての軽視・蔑視が読み取れる。

又、こうした発想が何に由来しているかもこの手紙から読み取れそうだ。即ち、一つは［神功］という語である。これは**神功皇后**のことであり、いわゆる神功皇后の三韓征伐のことを指している。もう一つは［豊国］という語である。これは**豊臣秀吉**による文禄・慶長の役、朝鮮半島への出兵、侵略を指している。征韓論の名前は、三韓征伐をイメージした言葉とも云われている。弟子の維新の志士達が松陰に学びその影響を受けた、とすれば松陰は何を学び、その影響を受け発想を持ったのか？。その事情を考えてみたい。

松陰に影響を与えた人物として**佐藤信淵**(1769生まれ)が考えられる。幕末の嘉永3年(1850)に82歳で没した秋田出身の特異な思想家・農政学者・兵学者だ。そのスケールの大きさから山師であるとも。その著書『宇内(うだい)混同秘策』(1823年)は松陰の主張の原型とも云える内容だという。天皇中心主義をもとに侵略主義的な大陸政策論、南進論を展開し、後世の〝八紘一宇〟の思想の源流ともなった奇書とか。明治以降昭和の敗戦まで注目を集め、国家主義者達に愛読された書という。江戸時代の武士・僧侶・学者といった知識階層は、その教養を漢文で学び身につけ、漢籍や先人の書の多くを筆写したり回読していた。

松陰は山鹿流兵学の師範の家で育ち英才教育を受け、歴史を**頼山陽**(1781～1832)のベストセラー『日本外史』(1829年刊)で読んだはずである。内容は一種の史伝小説で尊皇、神国思想に満ちており、自民族を優越視するものであったという。

佐藤信淵、頼山陽、そして吉田松陰といった系譜に共通しているのは、いずれも神功皇后や豊臣秀吉が登場していることであろう。では、神功皇后や豊臣秀吉には一体どんな意味があるのか、次に考えて見ることにしたい。

三韓征伐伝説と秀吉の朝鮮侵略

神功皇后といえば、戦前生まれの人は皆知っている話だが、今はどのように知られているのであろうか？三韓征伐は『日本書紀』(720年完)に登場するあくまでも神話・伝説である。要は「神功皇后が朝鮮半島の新羅という国に遠征して征伐し、高麗、百済も服属・朝貢する約束をした」という話なのだ。これはあくまでも伝説でしかないのだが、後世の多くの日本人はこれを歴史的事実と思った。あるいは教育によりそう思い込まされたということだ。事実では無論ない。では何故この話を創作したかについては、『日本書紀』が成立した当時の列島の事情からであるとする見方がある。当時の東アジアの情勢でいえば、白村江の戦いが663年で倭国と百済の連合軍が唐・新羅の連合軍に敗北していた。結果、百済は滅亡し倭国は存亡の危機に直面し、列島に立て籠もることを余儀なくされている。そこから国を建て直す為に、律令制度であるとか、中国的な都市の建設とか幾つか政策を立てた。そのうちの一つが本格的な歴史書を創ることだった。国号を日本とし、皇帝とは違う天皇なるものも登場させた。「昔から朝鮮半島は日本の属国であった」という宣言を中国、朝鮮の国に向ってしたかった、という見方である。中国は歴史的に中華の国であり、皇帝は周囲の属国に朝貢さて王として認める、という華夷思想で成り立ってきた。これに対して日本は、それを良しとせず独自に天皇という称号を名乗り、昔から周囲に属国も従えているんだ、といういわば虚構の歴史書を創り出したという解釈である。外圧に屈した屈辱感が生んだリアクションであった。更に言えば、倭国の誕生のルーツを探ると天孫降臨伝説にみられるように、どうやら半島にその起源がある。半島の方が本家で、列島はその分家だったかも知れない。実はそうなんだ、ということを隠しておきたいという複雑な思いがあり、自らのプライドを保つ為にもことさら優越感を持ちたかったのだろう。

この複雑な感情・意識が連綿として、民族の記憶として流れているのかもしれない。半島側にもこれの裏返しのものが受け継がれており、時に両民族の相剋を招いてきた。事実、半島からは仏教、儒教、農耕技術など文化的、経済的に多くのものを摂取してきた歴史があり、あちらからみれば教えて上げた、こちらが先生だという思いだろう。

秀吉の時代には天皇は存在は小さくなっているものの、神国思想は建国伝説や鎌倉時代の元寇時の神風伝説などを背景にして、武士の間に根強く浸透していた。
秀吉は明国のみならず、インドまで視野にいれて朝鮮半島に出兵したが、その背景にどんな動機があったのか諸説ある。主君信長が抱いていた海外進出の構想を凌駕することをやってみたかったのだ、という見方がある。一方で神功皇后伝説の存在があるとみる意見もある。『豊鑑』(1631年/竹中重門著)という書には、「秀吉公思ひ給へるは…我国より異国を攻めし事は神功皇后三韓を責給へし後は未だ聞かず…三韓に軍を遣はし、末の代まで我国の規模にせばや」とあると云う。 更に江戸時代中期以降においては朝鮮征伐が賞賛される

ようになる。兵学者・**山鹿素行**の『武家事紀』(1673年刊)では、「秀吉、晩年に及んで朝鮮を征伐、胆古今に抜出す」「本朝の武威を異国に赫すこと、神功皇后以降、秀吉治世にあり」とある。このあと幕末にかけては国学が盛んになり、神国思想は更に強くなる。一方前後7年間にわたった出兵により半島の人達が蒙った災禍は深く永く傷となり、未だに忘れられていない。韓国ドラマで秀吉は大悪人、 侵略された側から見れば当然そうだ。

江戸時代に地続きの明治になって、前時代の徳川幕府の権威を否定する為に、もう一つ前の時代の秀吉が人気となった。征韓論が台頭した時期には、文禄・慶長の役を題材にした歌舞伎が多く上演されたという。秀吉の外征が肯定的に評価されたということだろう。では、漢文が読めた武士等の知識人達と違って、江戸時代の庶民階層は中国・朝鮮といった異国や異人を何を通じて知り、どう意識していたのであろうか？。

江戸の文芸にみる異人・異国

江戸時代は、いわゆる鎖国体制、海禁策をとっていた。長崎を窓口としてオランダ、中国とは通商をし、朝鮮とは対馬藩を仲介とした朝鮮通信使外交を行なった。蝦夷は松前藩が担当し、南の琉球国とは朝貢外交をした。徳川将軍家を大君と称し武威を背にして、相手を夷狄として見下し従える、小中華体制という虚構の秩序で成立していた。もっとも朝鮮国にも、小中華意識があり日本を見下すところがあったようであり、微妙な関係だったのだ。清国も、朝鮮も日本も海禁策をとっていたので、接触が限定的な為大きく衝突するようなことは避けられた。庶民が中国や朝鮮のことを直接意識する機会は、次第に少なくなっていった。異国の人を一括りに唐人と呼び、長崎には唐人屋敷を置き、商人達が書籍・絵画等により学術や文化が輸入された。『水滸伝』、『三国志演義』等の通俗小説が輸入され、芝居や浮世絵のネタとなり、町人文化に影響を与えた。朝鮮通信使や琉球国の江戸上りの行列は一大イベントであり、彼らの風俗・芸能は道中の町や村、江戸や大坂に異国情緒・文化をもたらしたはずだ。一般庶民が日常的に楽しんでいたのは、人形浄瑠璃、歌舞伎狂言といった大衆娯楽としての芝居や浮世絵であった。その中で中国・朝鮮の人や文化に触れたのだ。

異国を取り上げた代表的な演目に『**国姓爺合戦**(こくせんや)』がある。今でも歌舞伎や人形浄瑠璃でよく上演されるが、初演は正徳5年(1715)大坂竹本座。作者はあの**近松門左衛門**である。連続17ヶ月間の大ロングランという人気を博した。以来、数々のバリュエーションがあるが、江戸時代だけでなく連綿として上演され続けてきた。明国の遺臣鄭成功(1624～1662)の活躍をモデルにした世界なのだが、お芝居では和藤内という人物に設定されている。当時の芝居評判記で「大極上上吉 父ハ唐土母ハ日本国…」とある。母が日本人の主人公が滅亡した父の国の再興の為に奮闘するところが共感を呼んだ。その感情には母が日本人だから優秀なのだ、という優越意識があると思われるところがある。役者の衣裳や音楽も中国風の華やかなものであり、国内ではお目にかかれない虎が登場したりするのも異国情緒を感じさせ、人気を呼んだのだろう。

『**天竺徳兵衛韓噺**』も人気の芝居だ。作者は四世**鶴屋南北**。宝暦7年(1757)初演の「天竺徳兵衛聞書往来」で、天竺徳兵衛なる人物が登場するのが嚆矢らしい。この主人公のモデルは実在の日本人船頭らしいが、劇中では異国帰りの船頭で朝鮮国の臣木曽官と設定される。木曽官は蝦蟇の妖術を操り、日本を転覆させようと企むがこと破れるという筋立てである。屋台崩しのスペクタクルもある異国趣味、怪奇趣味に溢れた今でも人気演目である。日本への反逆は、秀吉の朝鮮侵略の過去があるからあり得ることだとの心理があるようだ。鎖国中の江戸庶民が見た異国の夢であり、直接の加害者ではないという傍観者の立場で歴史を見ていたのだろうか。ここには朝鮮への侮蔑はないが軽視はある。

宝暦14年(1764)4月、大坂で実際に起きた事件を題材にした芝居がある。
『**唐人殺し＝韓人漢文手管始**』という演目である。史実として事件はこうである。

朝鮮通信使の随行員が対馬藩の通詞役と諍いとなり、口論の上殴ったことが原因で通詞役に殺害される。重要な修好行事中に起きた事件の処置を巡り、朝鮮外交を担ってきた対馬藩は日朝両国の意識のズレもあり、間に入って事件解決に翻弄された。 芝居としては明和4年(1767)に**並木五瓶**の作で初演されて以降、台本は様々に脚色されているようだ。

実録小説『唐人殺(珍説難波夢)』では、朝鮮側の随行員が実は父の敵だと知り、遂に討ち果たすという筋立てに脚色されている。敵討ちの場面での台詞でこう語らせているという。「同じ血筋とは雖も、我は色欲に迷い、父同然の伯父を討つ。夫れにひきかえ其方は、顔さえ見ぬ父の仇を討たんとて幾世の苦労、血筋同じ其方なれども、日本人の腹に宿れば、是れほどまでに違ふものか」と懺悔させる。先にみた国姓爺の場合と同じパターンである。。母が日本人だから優れているのだ、という考えである。朝鮮人と比べて日本人は優秀なのだ、という優越意識を持っていたということだ。

江戸時代末期から明治時代にかけての征韓論をはじめとした、アジア蔑視・軽視の意識の流れは、この様に庶民においても知識層においても根強く形づくられていったのだ。

東アジアで生きる道

明治維新以降昭和の敗戦に至るまで、桃水以外に中国・朝鮮に対して軽視・蔑視観の無い人がいなかった訳ではない。例えば、**勝海舟**である。彼は朝鮮や清国の人達との交流だけでなく、その文化への敬意と、偏りのない歴史認識を持っていた。自慢話が多く鼻につくところもあるが、『氷川清話』ではこう述べている。「朝鮮といえば、半亡国だとか、貧弱国だとか軽べつするけれども…しかし朝鮮をばかにするのも、ただ近来のことだよ。昔は日本文明の種子は、みな朝鮮から輸入したのだからのう。特に土木事業などは、ことごとく朝鮮人に教わったのだ」。朝鮮領有化政策を進める政治家や福沢を批判している。

戦後、首相を勤めた**石橋湛山**という経済ジャーナリスト出身の政治家がいた。病に倒れ短命内閣で終ったのが残念だ。彼は、第一次世界大戦が始まった大正3年(1914)にこう主

張している。「此問題に対する吾輩の立場は明白なり。亜細亜大陸に領土を拡張すべからず、満州も宜(よろ)しく早きにおよんで之を放棄すべし、とは是れ吾輩の宿論なり。」
「而して青島割取(かつしゅ)に由って、我が国の収穫するものは何ぞと云えば、支那人の燃ゆるが如き反感と、列強の嫉悪(しつお)を買うあるのみ。」(『東洋経済新報』11月15日号社説)
日本の悲劇的な将来を予見した卓見ではないか。イケイケドンドンと威勢が良いだけで、故なき自尊心からの思い上がった輩(やから)の言説に惑わされない賢者もいたのである。

欧米からの外圧と侵略に直面し、アジアの国々をそれから守るのがリーダーとしての日本の役割であると、頼まれもしないのに思い込んだ。欧米を敵に廻し、本来なら味方につけたかったアジアからも恨みをかう戦争にまで踏み込んでしまった。アジアを解放するという大義を振りかざし、解放どころか、自国を崩壊させてしまったのは。自分は正義の味方であるという意識に取り憑かれ、目的の為に手段を正当化させ、敵はおろか身内の犠牲や痛みにさえ無自覚になってしまったのである。誇大妄想の正義を口にすることで、視野狭窄に陥り、根拠なき信念や錯覚が冷静な判断を狂わせ、身を滅したのである。
相手が何をどう思っているのかを考えねばならない。相手の為にやってあげている、という過度の無自覚な思い込みが、結局は国家や民族間の不幸につながってしまうのだ。
自らの意識が何によっているかを、まず思い遣ることから始めねばと思う。隣国や関係国が何を考えているのかを、冷静に知ることが必要だ。軽々しい蔑視は未来を生まない。

中国は、清朝末以来の150年の屈辱の歴史を克服しつつある。その反動として中国が、大日本帝国のような危うい誇大妄想に駆られた覇権国家を目指すかもしれない。中国は、今やアメリカと経済・軍事両面で肩を並べるようになってきた。反日感情が今も根強い、北朝鮮や韓国という厄介な国も東アジアの隣国であり、日本は何処かへ引っ越すことも出来ない。それでもかつて犯した過ち、失敗を繰り返してはならない。その為にどうしたらよいのか。こんなバランスのとれた意見に出会った。
外交評論家の孫崎享氏は、著書『不愉快な真実』の中でこう述べている。
「最も危険な領土問題では、まず第一に相手の主張を知り、自分の言い分との間で各々がどれだけ客観的に分があるかを理解し、不要な摩擦は避ける」
「日本は、東アジア諸国が自国の繁栄の核心であることを認識し、複合的相互依存関係を強化することである。」　又、こうも主張しておられる。強く同意したい。
「日本の隣国中国は、経済・軍事両面で米国と肩を並べる大国になる。そして米国との協調のみを求めれば日本の繁栄があるという時代は終わった。」という事態を直視できるか否かである、と。福沢諭吉の脱亜論にも言及し、その考え方が敗戦を越えて150年間も日本人の中に、今も浸透していると。見通しは悲観しておられるが、諦めもしておられない。

桃水、海舟、湛山、等々…幾度となく良識は押し流されてきた、しかし歴史を繰返させてはならない。対馬に数年前旅したことがあった。だが残念ながら、当時は厳原にある半井桃水記念館を知らなかった。機会があれば今度は是非訪ねてみたいと思う。　(了)

参考資料:

『菅江真澄が見たアイヌ文化』(菊池勇夫/2010年刊)
『樋口一葉事典』(岩見照代他編/1996年刊)
『ある日本人の朝鮮観 半井桃水と日朝関係』(外垣内憲一/1996年刊)
『日本史 史料 4 近代』(歴史研究会編/1997年刊)
『それでも日本人は「戦争」を選んだ』(加藤陽子/2009年刊)
『明治維新と征韓論』(吉野誠/2002年刊)
『妄言の原形 日本人の朝鮮観』(高崎宗司/1990年刊)
『中近世における朝鮮観の創出』(金 光哲/1999年刊)
『日本人の朝鮮観 その光と影』(琴乗洞/2006年刊)
『貝と羊の中国人』(加藤 徹/2006年刊)
『漢文力』(加藤 徹/2007年刊)
『中国古典からの発想』(加藤 徹/2010年刊)
『歌舞伎手帖』(渡辺 保/1982年刊)
『唐人殺しの世界』(池内 敏/1999年刊)
『大君外交と武威』(池内 敏/2006年刊)
『嘘だらけの ヨーロッパ製 世界史』(岸田 秀/2007年刊)
『歴史を動かす 東アジアの中の日本史』(小島毅/2011年刊)
『不愉快な真実』(孫崎 享/2012年刊)

: 他WEB検索資料